

令和 2 年 7 月 3 1 日

資料提供

担当課室	農業環境・鳥獣害 対策室	農作物病虫害防 除所
担当者	大谷	岡本
電 話	073-441-2905	0736-64-2300

病虫害発生予報 第5号(8月予報) について

令和2年度病虫害発生予報 第5号(8月予報)を別添のとおり発表します。

病害虫発生予報 第5号(8月予報)

和歌山県農作物病害虫防除所

< 予報の概要 >

作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水稲	いもち病	並	野菜全般	ハスモンヨトウ	やや多
	紋枯病	並		シロイチモジヨトウ	並
	縞葉枯病	並	カンキツ	黒点病	やや多
	ヒメトビウンカ	やや少		かいよう病	並
	ツマグロヨコバイ	やや少		ミカンハダニ	少
	セジロウンカ	並		ヤノネカイガラムシ	並
	トビイロウンカ	やや多		チャノキイロアザミウマ	やや少
イチモンジセセリ	並	ゴマダラカミキリ	並		
コブノメイガ	やや多	カキ	炭疽病	並	
斑点米カメムシ類	並		うどんこ病	並	
			円星落葉病	やや多	
トマト・ミニトマト	疫病 黄化葉巻病	並 やや少		角斑落葉病	やや多
	アブラムシ類	並	果樹全般	フジコナカイガラムシ	並
	ハダニ類	並		カメムシ類	並
	ミナミキイロアザミウマ	少			
	ミカンキイロアザミウマ	並			

気象予報

1か月予報（予報期間 7月25日～8月24日 大阪管区气象台）

< 特に注意を要する事項 >

期間のはじめは降水量が多く、日照時間が少ない状態が続く見込みです。

< 予想される向こう1か月の天候 >

期間のはじめは、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。その後は、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。
 向こう1か月の降水量は、近畿日本海側で平年並または多い確率ともに40%、近畿太平洋側で多い確率50%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。
 週別の気温は、1週目は、低い確率60%です。2週目は、平年並の確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%） >

【気温】近畿地方	
【降水量】近畿日本海側	
【降水量】近畿太平洋側	
【日照時間】近畿地方	

凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

8月	月平均気温 (平年値) (°C)		月降水量 (平年値) (mm)	
	和歌山	28.1	和歌山	86.0
潮岬	27.0	潮岬	233.2	

I . 水 稲

1. いもち病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の葉いもちの発生ほ場率は50%（平成28%）、発病株率は2.0%（平成6.2%）であった。
- ② 県北部および中部の普通期栽培における7月中旬の葉いもちの発生ほ場率は4%（平成18%）、発病株率は3.8%（平成3.4%）であった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 穂ばらみ期防除を重点とし、葉いもちの多発ほ場では穂ぞろい期に追加防除を行う。
- ② 常発地では翌年から罹病性品種の作付けを避ける。

2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の発生ほ場率は0%（平成2%）、発病株率は0%（平成0.1%）であった。
- ② 県北部および中部の普通期栽培における7月中旬の発生ほ場率は0%（平成2%）、発病株率は0%（平成0.2%）であった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 穂ばらみ期に発病株率が20%以上のほ場では、早急に薬剤防除を行う。
- ② 出穂後も上位葉への進展がみられる場合には追加防除を行う。

3. 縞葉枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の発生ほ場率は0%（平成0%）、発病株率は0%（平成0%）であった。
- ② 県北部および中部の普通期栽培における7月中旬の発生ほ場率は0%（平成3%）、発病株率は0%（平成0.1%）であった。
- ③ 媒介虫であるヒメトビウンカの8月の発生量はやや少と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 縞葉枯病の発生が多いほ場は、ヒメトビウンカの防除を行う。

4. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり生息密度は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では0.5頭（平成9.3頭）、県北部および中部の普通期栽培では0.8頭（平成14.1頭）であった。
- ② 予察灯による7月1～20日の誘殺数は、紀の川市3頭（平成2.7頭）、上富田町4頭（平成0.5頭）、那智勝浦町5頭（平成7.5頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 縞葉枯病の発生が多い圃場は、ヒメトビウンカの防除を行う。

5. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり生息密度は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では0.8頭（平成5.5頭）、県北部および中部の普通期栽培では1.8頭（平成1.4頭）であった。
- ② 予察灯による7月1～20日の誘殺数は、紀の川市1頭（平成1.8頭）、上富田町4頭（平成29.4頭）、那智勝浦町20頭（平成265.3頭）であった。

6. セジロウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり生息密度は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では7.8頭（平成31.5頭）、県北部および中部の普通期栽培では36.2頭（平成53.2頭）であった。
- ② 予察灯による6月1日～7月20日の誘殺数は、紀の川市20頭（平成83.7頭）、上富田町499頭（平成82.3頭）、那智勝浦町182頭（平成87.9頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 穂ばらみ期に株あたり成幼虫10頭以上の発生を認めた場合は薬剤散布を行う。
- ② 令和2年度病害虫防除技術情報第3号（令和2年7月31日発表）を参照する。

7. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり生息密度は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では0頭（平成0.1頭）、県北部および中部の普通期栽培では0頭（平成0.3頭）であった。
- ② 予察灯による6月1日～7月20日の誘殺数は、紀の川市12頭（平成0.7頭）、上富田町157頭（平成0.7頭）、那智勝浦町172頭（平成3.2頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月中旬の発生に注意し、株あたり成幼虫5頭以上の発生を認めた場合は薬剤散布を行う。
- ② 令和2年度病害虫防除技術情報第3号（令和2年7月31日発表）を参照する。

8. イチモンジセセリ(イネツトムシ)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたりツト数は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では0（平成0.0）、県北部および中部の普通期栽培では0（平成0.1）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月上旬の発生に注意し、若齢幼虫の防除に重点を置く。

9. コブノメイガ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり上位2葉の被害は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では2.8葉（平成6.2葉）、県北部および中部の普通期栽培では1.9葉（平成0.4葉）であった。
- ② 蛍光灯誘殺箱（紀の川市）による6月1日～7月20日の誘殺数は8頭

(平年1.6頭)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 第1世代の発蛾最盛期は7月下旬頃と思われる。
- ② 防除適期は、粒剤の場合は第1世代の発蛾最盛期、その他の薬剤(乳剤、水溶剤、フロアブル等)の場合は第2世代幼虫発生時期(第1世代の発蛾最盛期の7日後)である。
- ③ 幼穂形成期後、出穂期頃までに上位2葉の被害葉率が40%になると10%程度減収する。それ以降の被害は被害葉率80%以上でも収量・品質に及ぼす影響は小さいので、県南部の早期栽培では防除の必要性は低い。

10. 斑点米カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部(田辺市以南)の早期栽培の本田における7月中旬の捕虫網20回振りによる捕獲虫数は1.7頭(平年5.8頭)であった。
- ② 予察灯による7月1~20日の誘殺数は、紀の川市12頭(過去4年の平均111.0頭)、上富田町23頭(過去9年の平均27.4頭)、那智勝浦町114頭(過去9年の平均76.1頭)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 出穂の早い作型で、周辺に雑草が繁茂していると被害を受けやすい。
- ② イネ科雑草が発生源となる。本田への成虫の飛来を防ぐためには、出穂10日前までには場周辺を除草する。
- ③ 出穂後、本田内でホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、シラホシカメムシなどの飛来を認めたら、乳熟期(出穂10日後)から糊熟期(出穂20日後)に薬剤を散布する。カスミカメムシ類の発生が多い場合は穂ぞろい期(出穂3日後)に薬剤散布する。

II. 野 菜

<トマト・ミニトマト>

1. 疫病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地栽培ミニトマトにおける7月下旬の発生ほ場率は0%(平年10%)であった。
- ② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 排水を良くし、株元に滞水しないようにする。
- ② 露地栽培では、降雨前の予防散布に努める。降雨前に散布できなかった場合は降雨後に早急に防除する。

2. 黄化葉巻病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地栽培ミニトマトにおける7月下旬の発生ほ場率は0%(過去7年の平均49%)であった。
- ② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、直ちに土中に埋めるか、ビニル袋に密封して完全に枯死させてから処分する。
- ② 施設栽培では育苗ほ、本ぽとも施設開口部へ目合い0.4mm以下の防虫ネッ

- トを展張し、媒介虫であるタバココナジラミの侵入を防止する。
- ③ 施設栽培では定期的な薬剤散布に加え定植期の粒剤処理により、感染適期である育苗期から本ば初期のタバココナジラミ防除を徹底する。

＜野菜全般＞

1. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の生息葉率は、ワタアブラムシ0.7%（平成0.8%）、モモアカアブラムシ0%（平成0.0%）であった。
 - ② 黄色水盤（紀の川市）への7月1～20日までの飛来数は0頭（平成12.7頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
 - ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

2. ハダニ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の発生ほ場率および生息葉率は、カンザワハダニでそれぞれ33%（平成27%）、6.7%（平成8.2%）であった。ナミハダニの発生は認められなかった（平成：発生ほ場率13%、生息葉率3.4%）。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
 - ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

3. ミナミキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 少
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率21%、生息葉率4.1%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① ナスでは、収穫果実の選別時に被害を認めたら防除を始める。
 - ② 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
 - ③ 発生が多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。
 - ④ 施設栽培では、栽培終了後に抜根した上で7～10日間以上施設を密閉してアザミウマを死滅させ、後作や周辺の野菜等での発生源とならないようにする。

4. ミカンキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率1%、生息葉率0.1%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① ミナミキイロアザミウマに準ずる。

5. ハスモンヨトウ

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発

生ほ場率5%、生息葉率0.2%)であった。

② フェロモントラップによる7月1～20日の誘殺数は、和歌山市733頭(過去9年の平均96.8頭)、紀の川市514頭(平年44.8頭)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 幼虫が中～老齢期になると薬剤感受性が著しく低下するので、若齢期(ふ化幼虫の集団の食害による白変葉がみられたとき)の防除を心がける。

② 抑制栽培エンドウでは、ウイルス病、鳥害や防風対策を兼ねて、は種後40～50日間寒冷紗被覆を行うと被害が軽減される。

6. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① フェロモントラップによる7月1～20日の誘殺数は、紀の川市11頭(平年19.3頭)であった。

② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ハスモンヨトウに準ずる。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部(海南市下津町)、県中部、県南部(田辺市)における7月中旬の発生ほ場率は39%(平年27%)、発病度は1.9(平年1.2)であった。

② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 秋雨時期における後期感染防止のため、8月中下旬の防除を徹底する。

② 伝染源となる枯枝や剪定枝の処理を徹底する。

③ 過乾燥等で樹勢が低下すると枯枝が増えるおそれがあるので留意する。

2. かいよう病

(1) 予報内容 果実発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部(海南市下津町)、県中部、県南部(田辺市)における7月中旬の春葉病斑の発生ほ場率は33%(平年30%)、発病度は0.1(平年0.4)であった。

② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 防風対策に努め、台風の接近等で強風雨が予想される場合には、事前に薬剤散布を行う。

② 夏秋梢の病斑は翌春の主要な伝染源になるので剪除に努める。

③ 幼木、高接樹ではミカンハモグリガの防除を徹底する。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

① 県北部(海南市下津町)、県中部、県南部(田辺市)における7月中旬の発生ほ場率は9%(平年27%)、発生葉率は3.1%(平年6.6%)、100葉あたり雌成虫数は6.1頭(平年21.6頭)であった。

② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるため、同一系統の薬剤を年間に2回以上使用しない。

4. ヤノネカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の発生ほ場率は3%（平年1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 第2世代2齢幼虫の発生最盛期は8月中旬頃と考えられる。発生ほ場ではこの時期に、散布むらがなく葉裏までかかるように、十分量の薬液を丁寧に散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の果実の被害ほ場率は9%（過去7年の平均20%）、発生ほ場率は0%（過去7年の平均1%）であった。

- ② 予察ほ場（無防除）における黄色粘着トラップによる7月11～20日の誘殺数は由良町19頭（平年167頭）、有田川町9頭（過去6年の平均31頭）であった。

- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 地域での発生消長調査の結果を参考に適期防除に努める。
② 発生ほ場およびイヌマキやサンゴジュの隣接ほ場では防除を徹底する。

6. ゴマダラカミキリ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の発生ほ場率は3%（平年1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 成虫の捕殺に努めるとともに、放任園周辺など発生の多いほ場では、産卵防止および食入幼虫対象の防除として薬液を主幹から株元に散布する。

<カ キ>

1. 炭疽病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における7月中旬の発病果率は「富有」0%（平年0.1%）、
「平核無」・「刀根早生」0%（平年0%）であった。

- ② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発病枝や発病果がみられる場合は剪除する。
② 台風が接近する場合は事前に薬剤を散布する。散布できなかつたほ場では台風通過後速やかに散布する。
③ 密植ほ場や風通しの悪い場所は発病しやすいので、ほ場内の通風・採光をはかり、薬液をかかりやすくする。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部における7月中旬の発生ほ場率は「富有」71%（平成67%）、
「平核無」・「刀根早生」18%（平成25%）であった。

② 県北部における7月中旬の発病葉率は「富有」5.1%（平成7.1%）、
「平核無」・「刀根早生」0.5%（平成1.1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 病原菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏に丁寧に薬液を散布する。

② 一般に盛夏期の発病は一時休止するが、山間部や風通しの悪いほ場は発病を繰り返しやすいので、これらのほ場では秋雨前の予防散布に努める。

3. 円星落葉病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部における前年10月の「富有」における発生ほ場率は47%（平成44%）、
発病葉率は4.1%（平成5.6%）であった。

② 梅雨期の降雨は多かった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 樹勢が低下すると発病が助長されるため、適切な肥培管理や水分管理を心がけ樹勢維持に努める。

② 子のう胞子の飛散が続く8月上旬まで防除が必要である。

4. 角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部における前年10月の「富有」における発生ほ場率は88%（平成65%）、
発病葉率は9.0%（平成13.1%）であった。

② 梅雨期の降雨は多かった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 樹勢が低下すると発病が助長されるため、適切な肥培管理や水分管理を心がけ樹勢維持に努める。

② 本病は7月頃から発病し二次伝染を繰り返すので、多発ほ場では発病後も防除を励行する。

5. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部における7月中旬の発生ほ場率は、「富有」53%（平成54%）、
「平核無」・「刀根早生」0%（平成19%）であった。

② 県北部における7月中旬の寄生果率は、「富有」3.2%（平成5.2%）、
「平核無」・「刀根早生」0%（平成0.8%）であった。

③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 樹体生育期における防除適期は幼虫発生時期であるため、幼虫発生盛期の直前に薬剤散布を実施する。

② 予察ほ場（無防除、紀の川市粉河）における近年の第2世代ふ化幼虫の初発は7月22～27日頃であり、幼虫発生盛期の直前は8月上旬頃と思われる。

③ 枝葉の混み合いをなくし、薬液が果実に十分かかるよう丁寧に散布する。

<果樹全般>

1. カメモシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察灯による7月1～20日のチャバネアオカメムシ成虫の誘殺数は、紀の川市粉河で306頭（平年440頭）、有田川町奥で113頭（過去6年の平均960頭）、みなべ町東本庄で118頭（平年1,095頭）であった。

② 予察灯による7月1～20日のツヤアオカメムシ成虫の誘殺数は、紀の川市粉河で207頭（平年166頭）、有田川町奥で119頭（過去6年の平均201頭）、みなべ町東本庄で196頭（平年376頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きく、特に山林隣接ほ場では早くから被害が出やすい。

② ほ場内での果樹カメムシ類の発生及び被害状況をよく観察し、防除は発生に応じて早めに行う。

③ 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所の果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○**農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ** <農作物病虫害防除所>

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html>

○**和歌山県ホームページ** <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所の各担当までお願いします。

水稲、野菜、花き

本所（紀の川市、農業試験場内）

TEL 0736-64-2300

カンキツ

有田川駐在（有田川町、果樹試験場内）

TEL 0737-52-4320

カキ、モモ

紀の川駐在（紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内）

TEL 0736-73-2274

ウメ

みなべ駐在（みなべ町、果樹試験場うめ研究所内）

TEL 0739-74-3780